

どんどんつながら

「川越の会」

池田正明 (高28回)

「川越の会」という会があります。これは最初、飯田高校出身の川越市とその周辺の医療関係者が集まって親睦会をやりましょう、ということがきっかけで始まった会です。最初の6年間は不定期の開催でしたが、平成25年からは毎年開催しており、今夏で7回を数えることとなります。

偶然が偶然を呼んで…

この会が開かれることになったきっかけは、いくつかの偶然からでした。

私は高校の同窓会が飯田であった折り、高校時代の友人の実家を訪ねてご両親に久しぶりにお会いし、近況などお話しする機会がありました。今は埼玉医大にいらっしゃることをお話ししたところ、親戚にあたる佐々木康綱先生(高23回)が最近埼玉医大に赴任されている、と伺ったのです。佐々木先生はこの時埼玉医科大学病院に新設された臨床腫瘍科の

も飯田高校の出身で、連絡や名簿の作成などの全ての段取りを行ってくださったことも大きかったように思います。

川越の会の第1回は、2006(平成18)年5月12日に川越市内にある松鮪の2階座敷を借りて、ここに11名(大学4名、地元病院5名、その他)が集まりました。私はこの時埼玉医大に赴任して10年以上の月日が経っておりましたが、その間、埼玉で知っている飯田高校出身者は僅か後輩1名でしたので、このように大勢の飯田高校出身の先生方と地元川越で同窓会が開ける日がくるとは、全く考えておりませんでした。

川越から都内、関東、そして飯田へ

その後は、川越に限らず、都内を始め関東一円でご活躍の同窓生が、はるばる川越までお越しいただくようになり、今までにご参加いただいた方は35名になりました。勤務地別では、埼玉11名、東京19名、神奈川2名、栃木2名、茨城1名と、今では東京で勤務されている方が多くなっております。また、卒業回は、高6回から高58回生まで幅広く、科別では、内科が6名、医歯学の基礎系研究者も6名、歯科、小児科と産婦人科が各3名、放射線科と精神科がそれぞれ2名、皮膚科と整形外科が1名、大先輩の木村政之先生(高18回)に加えて、現役の厚生労



●いけだ・まさあき
1983年岡山大学医学部卒業
精神科研修の傍ら概日リズムの研究を開始。アリゾナ大学医学部留学などを経て2009年埼玉医科大学生理学教授
研究テーマは「時計遺伝子BMAL1と概日リズム」。

教授・診療科長に就任するため、国立がんセンターから赴任されたばかりで、しかも、私が研究プロジェクトを実施していた同じゲノム医学研究センターに、臨床腫瘍科の研究室をオープンされた時期に重なっており、先生にはすぐにお目にかかることができました。

もうひとつは、当時、佐々木先生のとこに、癌の化学療法に勉強に飯田高校出身の内科の先生が来られるようになったこと、また、川越で最も有名な産婦人科病院(愛和病院)の上里忠彦先生(高18回)・忠司先生(高20回)ご兄弟が、同じく川越にある埼玉医大の総合医療センター放射線科の本田憲業教授(旧姓・平田、高21回)と同じ鼎出身ということ、すでにお付き合いがあったこと、このようなことが川越の会開催のきっかけとなりました。

最初の会がとんとん拍子に開かれることになったのは、佐々木先生の研究室秘書の佐々木久子さん(高23回)働省関係者が2名などとなっており、特に基礎医学系の研究者の多いことに加えて、大学で勤務されている医師や歯科医師が多いことも特筆されます。開催のお知らせは毎回50余名宛に発送しております。この会にかつて参加されたことのある同窓生3名が既に地元に戻って医院、病院あるいは保健所で活躍をされており、地元と関東地区をつなぐネットワークも形成されつつあります。

この会は、当初より飯田高校出身の医師・歯科医師、医歯学系研究者の親睦のための会として開催されており、今もその目的は発足当時と変わっておりません。会の正式名称はなく、連絡のために「川越の会」としており、会長や役員といった役割分担といったものもありません。おそらく枠がなくとも、飯田高校出身というつながりがきっかけで同窓生同士がどんどんつながって行く会というのがある意味貴重で、これが長く続いている理由なのかもしれません。実際、この会がきっかけで、お互いの交流も始まっています。このような会ではございますが、この機会に在京同窓会諸氏からのご助言をいただければ幸いです。



2016年7月に開催された「川越の会」参加者の集合写真